

昭和九年五月十一日 第三種郵便物認可
昭和十五年十一月廿五日印刷納本

昭和十五年十二月一日發行

(毎月一回一日發行)

通卷第八十三號

(館本所究研化文神精倉大)

大倉邦彥監修

躬行

十
二
月
號
皇紀二千六百年

三箇の信條

- 一、皇國精神を深める事
- 二、世の爲め家の爲めに盡す事
- 三、眞心を以て物事を判断する事

五箇の實踐

- 一、朝早く起きて神佛を拜む事
- 二、物を大切にし食物は頂いて食べる事
- 三、勤労を喜び人の嫌ふ仕事は先に立つて行ふ事
- 四、禮節と規律とを守る事
- 五、自分の事は自分でする事

内容目次

御製と寫眞	扉
勅語	一
和らぐ心	三
躬行	六
歌壇感激	五
草鞋の紐を結ぶ	六
今日より取りかゝらん	八
感想	〇
人頼みを捨てよ	三
連續讀史と躬行(九)	三
講座	三
大倉山だより	三
編輯後記	三

明治天皇御製

うけつぎて

守るもうれし

千早ぶる

神のさだめし

うらやすの國

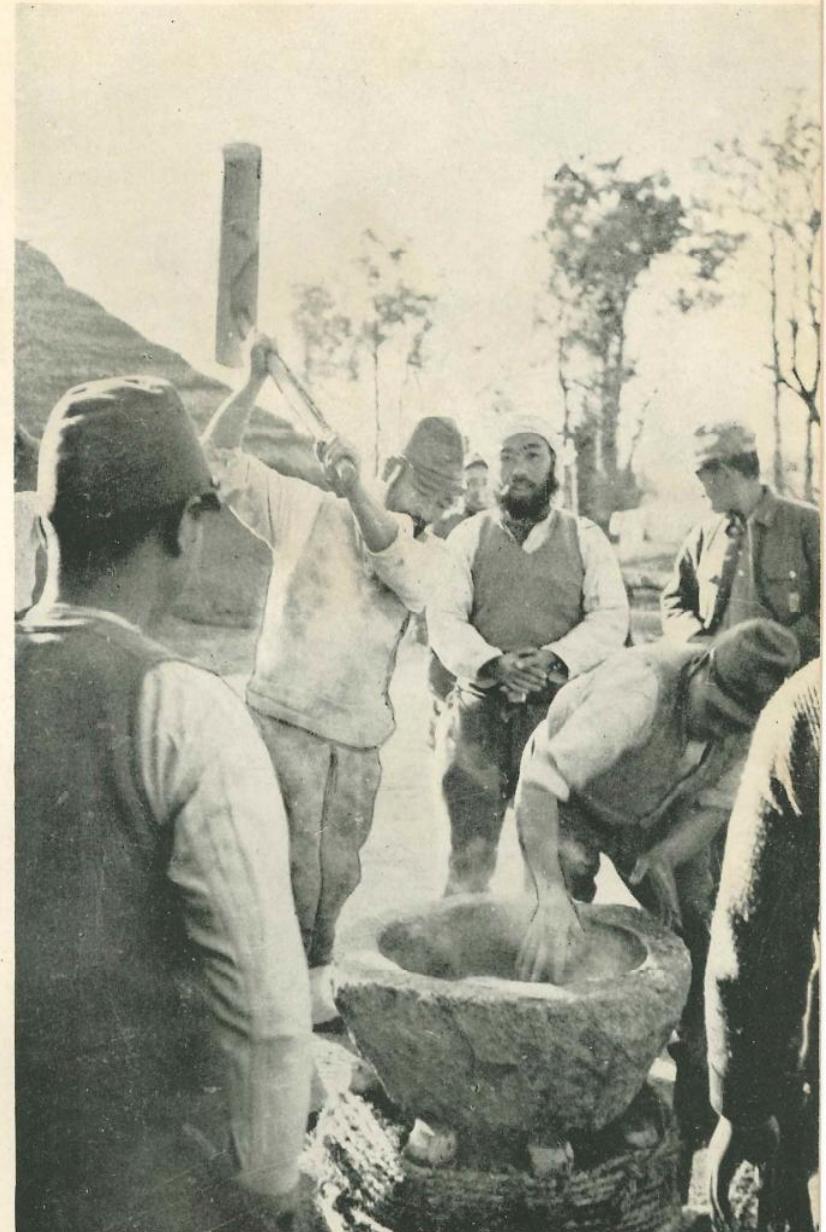
聖 紀 萬 歲



勅 語

(教育勅語済發五十年式典
に際して賜はりたる勅語)

皇祖考曩ニ聖勅ヲ降シタマヒテ國體ノ精華ヲ闡明シ國民道徳ノ大本ヲ昭示シタマヒシヨリ茲ニ五十年ナリ而シテ爾臣民克ク聖勅ノ趣旨ヲ體シ夙夜振勵文ヲ經トシ武ヲ緯トシ教化爰ニ洽ク學風以テ振ヒ國運ノ隆昌克ク今日アルヲ致セルハ朕ノ深ク懼フ所ナリ
今ヤ國際ノ情勢ハ曠古ノ大變ニ際會セリ爾臣民其レ世局ニ鑒ミ億兆心ヲ一ニシ時艱ヲ克服シテ大訓ノ聖旨ニ副ヒタテマツリ以テ德輝ヲ四表ニ光被センコトヲ期セヨ



搗餅の中陣

勅 語

(紀元二千六百年式典に
際して賜はりたる勅語)

茲ニ紀元二千六百年ニ膺リ百僚眾庶相會シ之レカ慶祝ノ典ヲ舉ケ以テ肇國ノ精
神ヲ昂揚セントスルハ朕深ク焉レヲ嘉尙ス
今ヤ世局ノ激變ハ實ニ國運隆替ノ由リテ以テ判カルル所ナリ爾臣民其レ克ク嚮
ニ降タシシ宣諭ノ趣旨ヲ體シ我カ惟神ノ大道ヲ中外ニ顯揚シ以テ人類ノ福祉ト
萬邦ノ協和トニ寄與スルアランコトヲ期セヨ

勅 語

(紀元二千六百年奉祝會
に降し賜はりたる勅語)

爰ニ紀元二千六百年慶祝ノ醸ニ臨ミ各國代表者竝ニ朝野ノ代表者ト歡ヲ罄クシ
樂ヲ偕ニスルハ朕ノ深ク懼フ所ナリ
今ヤ一大世變ニ際會スルモ平和ノ日ナラスシテ恢復セラレ萬邦ト俱ニ其ノ慶ニ
賴ランコトヲ望ム

和 ら ぐ 心



どんな力自慢の人でも、うつかりして居る時には、一寸横から押されても、ゆるぎ
ます。まして力の弱い人なら、一堪りもありません。然しちやんと用意して構へて
居りますれば、さう易々と搖ぎは致しません。それですから相撲、柔劍道や藝事に
至るまで、先づ構へと云ふものが大事なこととなつて居ります。構へがあれば心に
落付と餘裕が出来ます。力の方面ばかりでなく何でも心構へと云ふものが出来て居

りませんと、一寸した事に出来つても、心に動搖が來まして、折角持合せの餘力がありましても、何も彼も總くづれになつてしまひます。

今度のヨーロッパ戦争で、ボーランドや佛蘭西が、あゝいふもろい負け方をしたと云ふことなどは、全く國民の心構へが足りなかつたからであらうと思ひます。あれだけの武備を持ちながら、あんな呆氣ない負け方をする筈がありません。是を思ふ時に、私共銃後の生活に於きましても、只今の心構へが出來て居ませんと、内からくづれてしまひます。

既にもう三年戰つて來ました。初めはほんの一寸したつもりであつたのが、段々と事が大きくなつて参りましたから、自然何も彼も引緊つて参りました。統制は強化されるにつけて、これもあれも制限されて、窮屈になつて参りますると、もう心構へのない人々は、これは敵はん、さう締めつけられては困るといつて、ぐづくいふ聲が聞えて居ります。日本人はそんな弱い國民ではありますけれども、何しろ是迄長い間、安樂、氣樂な、自分に一番都合のいゝ生活に憧れて居りました爲

に困難に堪へ忍ぶと云ふ稽古が出来て居りませんから、こゝは一番心を鍛へて、これ位な事は何でもないと云ふ、今日の心構へを固める事が大切なのであります。それさて出来て居りますれば、苦みを苦しみとも思はず、笑つて困難を踏越えて、益力を生み出して参ります。それが苦みの中に明るい、和らぎの心を産み出します。肚を決めて、決心してしまへば、後は却つて樂な氣持で、落付きが出来るものであります。

勝海舟の歌に

切結ぶ太刀の下こそ地獄なれ踏み込み行けば後は極樂
と云ふのがあります。くよくしないで、一度胸を決めて、も一步踏み込めば却つて氣樂に落付いてくる。其一步と云ふ手前が苦勞なものであると云ふ體験を歌つたものであります。一寸考へますると、緊張し切つとる中から、さうした落付きや和らぎの心が、出て来さうもないと思はれますか、そんなものではありません。丁度友達揃つて山登りに出かけます時など、隨分困難とか、危険、苦みに出つ會す。そん

な時に、こりや堪らん、折角樂みに來てこんな事ぢやつまらんと云つて、ふうく
云つたり、怒つて見たり、舉句の果は止めにして、家に歸つてしまつたんでは、山
登りになりません。その苦みと辛さに堪へ乍ら、互に顔を見合せて、勵まし合つて
は我慢致します時、遠足や山登りの意義と喜びがあります。それでこそ、和らぎの
心が湧いて参りまして、苦みから生み出す喜びを味ひます。誰も彼も、同様に苦み
困つて居る時、皆と共に一緒に堪へ忍ぶ所に、お互同士の間にも、和らぎの心が生
れるのであります。東京の大震災の時に、よくそれを實際に味ひました。

不自由、窮屈は自分だけではないのに、何うかして自分だけ甘く逃れようとして、
ずるい事を考へ出して、得をし様とする心が起つたならば、心静かに胸に手を當てゝ考へれば、すぐわかる事であります。往々自分の事だけ、自分の家の事だけに、捉はれて居る事がありますから、反省する必要があらうと思ひます。
それと云ふのも御承知の通り、明治以來、西洋の倫理、西洋の社會思想と云つた
様なものが、どしく我國に入つて参りまして、それが相當國民の心の中に、深く

しみ込みつゝあつたと思ひます。西洋の倫理道德の本は、各人各人の快樂を得ると
云ふことが土臺となつて出来て居りますから、快樂を求め、苦みを避けようとする、
己れの満足から出發するといふ事になつて居ります。その結果、權利の主張が盛ん
になりますし、又外からの干涉を受けずに、自分の好む所を行ひまして、欲するが
儘に生活をして行くのが、人間としての進歩であるとなつて居ります。

その事が政治に表はれて参りますと、多數決本位となるのであります。つまり、
自分の好む所を、多數の人々に賛成して貰つて、それを力として自分の考へを成就し
ようといふ事になります。進んでは、他人を自分の考へに引入れたり、反対の立場
の者を負かしたりする爲めには、理論鬭争といふもので、相手を打碎いて、自分の
考へを立てゝ行かうとするのであります。かういつた様な外國の流儀を學んで、我
が國でも、理窟で以て争つて、打勝つて行かうとする様な事が、多くなつて参りま
したから、どうも和らぎの精神が、餘程少くなつて來たと思ひます。
いま一つ、外國流を學んだ事の中に、合理主義といふことがあります。近頃何處

でも此處でも、合理的にやれといふ言葉が使はれます。勿論道理に適つて合理化するといふ事は、結構であります。これを誤つて、何でも理詰めで物事を決めて行かうといふ傾向が流行りまして、何となくギコチない所がある様に思ひます。さうして、理窟以外にもつと高い、尊い方面を忘れて來た様な感じが致します。

高い尊い心と申しますのは、どんなものかと申しますれば、それは日本人が昔から、大變に尊んで、誰もが持たなければならぬ心、人間としての土臺だと考へて居りました心であります。一口に云へば、額く心とでも申しませうか、自分より以上のものを認め、人間以上の力を信じて、それに對して、自己を空しうして、捧げ額くといふ考へ方なんであります。かういつた様な尊い心持が、自分の我を無くして、人に對しては親切な心となり、内に省みては反省の心となり、和らぎの心となるのであります。

考へてみますと、之迄の國民の生活は、一番便利なこと、面白いこと、自分の利益都合のいゝ事ばかりを、目あてにして働いて居た様な氣が致します。それ等を

手に入れるためには、金さへ支拂へば大抵望みは叶へられました。ですから、金を手に入れると云ふ事と、金で望むものを手に入れると云ふ事に、心をくだいて参りました。其間を俐巧に立廻つて金が出来たり、地位が得られたりすると、成功者と云はれたのであります。さうして、つまりは、金の遣り取りの世の中となつてしまつた感があります。それは獨り商工業者のみではありません。高尚な仕事に従事する人々までが、段々さう云ふ頭になつて参りました。

ところが、今度の此時局に遭遇致しまして、國防第一と云ふ事になりますと、是迄の様に、個人の生活満足と云ふ事の爲めの仕事をして居つたのでは、國防計畫は、立たないのであります。大處高所から觀て、全國民の仕事も生活も統制して、國防計畫を充實しようと云ふ事になりました。此事さへハツキリすれば、不自由や窮窟な事も文句はない筈であります。たゞこれ迄の長い間の習慣が殘つて居りますから、不満の心も起つて參りませうが、ぶんくして見たところで益々自分の首を締める様なものであります。

なに歴史あつて以來の大事變、大困難に出會つて居る上に、搗てゝ加へて、三方に敵を受けて居ります。其中を切り抜けて、東亞を建直さう、世界の平和を打ちて様と云ふのでありますから、これ位大きな男らしい大事業はあります。それがやれなければ、元も子も取られてしまふと云ふ、瀬戸際なんでありますから、これ位の困難は覺悟の前だと、奮起しなければならんのであります。その氣持、その覺悟で、御奉公するといふ決心を致しますれば、そこに自然明るい光が射し込んで参りまして、内から和らぎと喜びが感ぜられます。

今まで見たい物を見、買ひたい物を買ひ、思ふがまゝになれば喜んで居りました。しかし、さうした喜びは外から引寄せて得られた喜びでありますて、謂はゞ外から取つて着けた満足であります。

内心から湧き出て来る喜びと、和らぎの心は、大口を開けて笑ふ喜びではあります。しかしこれども、滾々として盡きない、微笑みの喜びとでも申しませうか。例へば、若き母親が、つひ先頃までは、親の許に世話を焼かせて、あれが好きだ、これが嫌

ひだと云つて、我儘で親を困らせて居つたのが、嫁入りをして、もう子供が生れましたと、それが最後で、自分の事は考へてはゐられません。我儘は昔の夢で、生れた子供の爲めに、身なり構はず、夜も寝ずに捧げ切つてゐる姿は、一面から云へば、みぢめにも見えますし、氣の毒とさへ思はれますが、若き母親に取つては、その苦しみこそ、喜びと和らぎの活動であります。かうなると、苦しいから止める、娘時代に比べて、不自由だから、子供は人に預けよう、昔のあの思ひのまゝの生活に歸りたいとは決して思ひません。赤ン坊の母として、その子の生長の爲めに、自分の一切を捧げ、苦勞して満足して居るのであります。苦しみの中にも、平和な喜びを見出して居ります。かうして人間として、段々と練れて、一人前の人となるのであります。

今は國を擧げて生みの苦しみ、育ての苦勞の時であります。この時局多端の時にも、二千六百年記念祝典は、國民に和らぎと歡喜を與へて居ります。内外の情勢もこんな時だから、記念祝典など見合せにしようといふのではありません。この多端

な中にも、國民的喜びと和らぎの心が閃めいて居ります。勿論派手なケバくしい騒ぎではなく、落ついた和やかなお祝が催されようとして居りましたのも亦、困難の中の喜び、緊張の中の和らぎであります。

和らぎの心、和やかな氣持、それ等は何れも思ひ遣りの種であり、情けの徳であります。かんくに怒つて居ては、情けの心は出て参りませんし、こちくの氣分では、思ひ遣りなど出よう筈はありません。實に、和らぎの心は、總ての徳の島であり、調和の花を咲かせ、希望の實を結ばせます。でありますから、我國では、この和らぎの心を和魂と申しまして、神の力、靈の發露として、之を神として祭つた程であります。現に攝津の住吉神社は、この和魂を御祭神としてお祀りしてあるのであります。その謂れば、神功皇后の三韓御征伐の際に、大軍を朝鮮に進められました時、住吉の神の、和魂は、輸送船の鎮めとなつて、守つて下されたといふことであります。それで、只今でも、この住吉神社は航海の守神様となつて居まして、我が海軍などでは非常に崇敬されて居る様な譯であります。

和らぎの心は、機械に取つての油の様に、人間同士の間を調和する心でありますて、公共道德といふことも、この和らぎの心から出發するものであります。先にも申しました様に、一口に和らぎの心と申しましても、芝居娛樂、又は人の親切から引出された和らぎの心は、外から與へられた喜びで、全く人賴みであります、外からの預りもののやうなものでありますから、本當の喜び、和らぎは、己れの心の深い奥から滲み出で来るものでなければなりません。

浅瀬には、ほんの一寸の風にでも波が立ちますが、深き瀬にはなかく波立たないと申します通りに、人間の心も奥深く廣い心境になつて、肚が出来て居れば、何時もおだやかで、和らぎの心は、顔にまで表はれるものであります。一寸した事に騒いだり、腹立つたり、いらなくしたりするのは、心が淺くて、自己中心だからであります。時局柄、何となく物の不足から不自由だと不便だと云つて、呴いて居る聲が聞えるのは、浅き瀬の仇波であります。今こそ我が國民はお互ひに、肚を鍛へ、廣い深い心境を練つて、苦難の中にも微笑みの和らぎを見出す様にならなければ、

長期の構へは出来ないと思ひます。
只今私は東洋に對して、日本の使命を果さうとして突き進んで居ります。東洋を立派なものに育て上げよう、和らぎの世界を築き上げようとして、生みの親、育ての親となつて努力してゐる所であります。只今の苦勞不自由は、親心を以て耐へもし、甘んじて受けながら、其上職分々々で奉公しなければなりません。その不自由と苦しみの中にも、生ひ立つて行くものへの希望は、自ら勝利の喜びと和らぎを感じるのであります。

元田永孚

中庸

勇力男兒斃ニ勇力。

文明才子醉ニ文明。

勸君須擇中庸去。

天下萬機歸ニ一誠。

感激

としをへていやさかえゆくひのもとのれきしをしのびことほぐよきひ

いくそたび紀元は二千六百年とうたひかへすもおもひつきせず

いひしれぬこのよろこびはときもよしはれしみそらのひかりにかよふ

しづがやのひとももろともラヂオなるたふときみこゑにばんざいはふ

ほまれあるすめらみたみとうまれこしわがみかしこしわすらるべしや



草鞋の紐を結ぶ



越後國上山の五合庵で静かな朝夕を送つてゐた

良寛和尚の許へ或る日一通の手紙が届けられた。

それは和尚の實家出雲崎の橘屋山本家の主人由之の妻女やすからであつた。

和尚は讀んでゆく中に一寸眉をひそめながら、「衲にはとても出来さうもないが、兎も角出かけて見よう」と云つて使の者を返した。橘屋もその頃大分家産が傾きかけて來たので、それを苦にしたものか僅か十七歳の伴馬之助が急に放蕩に身をもちくづして手のつけようもない状態だつたから、何卒意見をし

てもらひ度いと云ふのであつた。

國上山から出雲崎までは三里位の道程ではあつたが、當時既に五十の坂を越してゐる良寛和尚にとつてはさう簡単には行けなかつた。然し、肉身の甥のことを思へば出かけない譯にはいかなかつた。和尚が橘屋に着くと家内中一同で出迎へたが、馬之助は早くもその目的を察して、「伯父上様には遠路わざく御苦勞様でござります、何か急の御用でも」といふ様な皮肉交りの挨拶をするのだつた。が何といつても一番喜んだのは母のやす女であつた。

所が、一日經ち二日經ち三日經つても、和尚は何一つ小言らしい小言一つ云はない。その中に何とか

身に沁みる様なお説教でもあるだらうと期待してゐたが、四日目の朝になると和尚は突然山へ歸ると云ひ出した。驚いて引留めようとしたが、何としても

きかないでの仕方がなかつた。馬之助も愈々伯父が歸るといふので玄關まで見送りに出た。

和尚は足に脚絆を纏ひ旅支度を整へて、馬之助に「今度は何時會へるかも解らない。お父さんやお母さんとの云ふことをよく聽いて孝行を爲なければいけませんぞ。それから、眞に濟まんが草鞋の紐を結んでもらひたい」と云つた。馬之助も、今まで何か伯父から意見でもされたら大いに反抗してやらうと張切つてゐたが

何も云はずにそのまま伯父が歸ると云ふので些か拍結んでもらひたい」と云つた。馬之助も、今まで何か伯父から意見でもされたら大いに反抗してやらうと張切つてゐたが

誰一人聲を出す者もなく、和尚も黙つたまゝ還つて行つた。母は滂沱として落ちる涙をとどめもせずに和尚の後姿に合掌してゐた。この後馬之助が生れかはつた様に從順になつたことは云ふまでもない。

子抜けの體だつた。黙つて草鞋の紐に手をかけ——「この前にも斯うしてこの紐を結んであげたが、僅かの間にこんなにまで衰へられた。足の甲の肉がめつきりお瘠せなさつたなあ」

斯う思ふと流石は肉身の間柄である。馬之助はじつと見つめたまゝ動かなかつた。和尚も萬感胸に迫つて言葉には出し得ない。尊い心と心の觸れ合ひの瞬間である。和尚の眼から一滴の涙が落ちて、かがまつてゐる馬之助の襟首へ靜かに垂れた。

馬之助は電光に打たれた様にはつとして我にかつた。この時一切の迷夢からさめたのだつた。

明日の日を待たず

今日より取りかゝらん

けまいかと言つて頼んだ。

「通鑑綱目」といふのは、司馬
光の「資治通鑑」を宋の顧學朱
熹が省約した史書で五十九卷あ
り、孔子の春秋の意を寓して名
分を正すを主眼とした點で、我
が、さてなかく「今日只今よ
り」取りかゝれない、と云ふの
がひと弱點である。

に年末に限つたことではない
してゐる。いつも思ふことであ
るが、年末になると何んとなく
心慌だしく、落ち付かぬもので
ある。これと云ふのも、ボヤボ
ヤと月日を重ねて來た憾みが、
残るカレンダーの一枚々々に逆
に數倍して多いからである。そ
して舉句の果ては、さあ、來年
はあゝもしよう、かうもしよう
と胸算用に忙しい。これはたゞ
が人の弱點である。

かう云ふ話がある。徳川時代
のこと。年の暮も押しつまつた
或日、菅得庵が時の大儒林羅山
の所にやつて來て、自分はまだ
「通鑑綱目」を讀んだことが無い
が、先生どうか私の爲に明春を
期してその講義をしてはいたゞ
北畠親房卿の「神皇正統記」も
之に淵源すると言はれてゐる位
で、徳川時代に入つては藤原惺
窩を初め林羅山等の朱子學派の
人々の頗る尊重したものである

羅山は得庵の言葉の終るを待
つて答へていふには、若し貴殿
が心から眞にそれを讀みたいと
いふなら、何も來年を待つ必要
は無いではないかと。そこで大

晦日から早速講義を始めたとい
ふのである。これは羅山の好學
を物語る話として「先哲叢談」に
載つてゐるものであるが、人生
の大事な態度をよく教へてゐる
と思ふ。

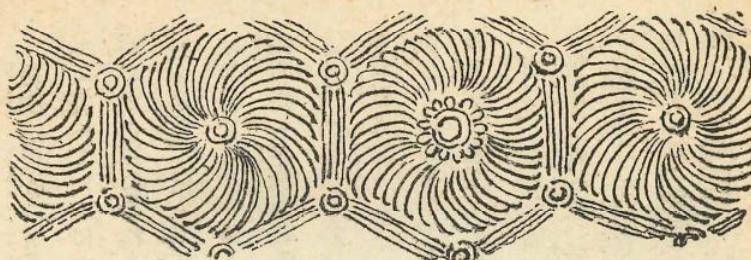
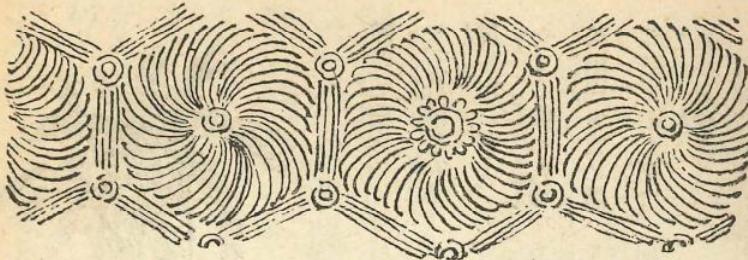
今日の一日も死際の一日も何
と再び明日は明後日はと言ひつ
つ、その年も亦遂に何事もせず
待つて取りかゝらうとする者が
多い。

氣分を新にし、覺悟を決定す
るにはそれも一つの方法ではあ
るが、古人の句にも、來年は來
年はとて暮れにけり、といふの
がある通り、今月はもう仕方が
ないから、來月からにしようと
言つてゐる間に、忽ち次の月を
無爲に過し、まあ今年はいゝと
して、來年からしつかりやらう
と、さも決心でもしたらしく見
えたのが、さて年が改つてみる
何でも、何か新しいことを始め

けまいかと言つて頼んだ。
「通鑑綱目」といふのは、司馬
光の「資治通鑑」を宋の顧學朱
熹が省約した史書で五十九卷あ
り、孔子の春秋の意を寓して名
分を正すを主眼とした點で、我
が、さてなかく「今日只今よ
り」取りかゝれない、と云ふの
がひと弱點である。

かう云ふ話がある。徳川時代
のこと。年の暮も押しつまつた
或日、菅得庵が時の大儒林羅山
の所にやつて來て、自分はまだ
「通鑑綱目」を讀んだことが無い
が、先生どうか私の爲に明春を
期してその講義をしてはいたゞ
北畠親房卿の「神皇正統記」も
之に淵源すると言はれてゐる位
で、徳川時代に入つては藤原惺
窩を初め林羅山等の朱子學派の
人々の頗る尊重したものである

けまいかと言つて頼んだ。
「通鑑綱目」といふのは、司馬
光の「資治通鑑」を宋の顧學朱
熹が省約した史書で五十九卷あ
り、孔子の春秋の意を寓して名
分を正すを主眼とした點で、我
が、さてなかく「今日只今よ
り」取りかゝれない、と云ふの
がひと弱點である。



新體制への早道は、上に立つ人、知識ある人が、先に立つて範を示すことである。それが出来ないから、新體制運動の必要があるとも云ひ得る。

標語に次ぐ標語、それは何時も美辭善語である。しかし、口から耳へ、人から人へと空廻りして國民は動いてゐない。薬の廣告を口すさんだけでは病氣はなほらない。

思想の問題は重大である。特に左翼思想の問題は喫緊事である。心配し過ぎてもよくなないが、無關心でも居られない。その確なる實情を知る當局が、肇國の精神によつて對處することを俟つより外はない。

何か一つ氣になる弱みがある方が、人間としてのよさが出て来る。持病のある人の方が、健康體の人より長生きするさうである。だから、自惚れと傲慢は己れの敵であるとも云ひ得る。

大食ひも癖であり、小食も癖である。癖は後からしまつたと後悔しながらも、それを繰返すことから芽生えて来る。一生の損得は、かうして決つて来る。



人頼みを捨てよ

—平生工夫あれ—

「あの人があつたが、鐵道省の○○○長の時、列車には、それ自體の名前をつけなければいかんといふ意見を出して、我國に初めて、富士や櫻や燕といふ列車が出立てる偉い人物であった」と、頻りに、某人物の獨創性を賞め讀へてゐた一團の人々の話を、傍で聞いてゐた私は、何となく日本人の姿に、一種の哀れを覺えた。

勿論、日本で、列車に名前のつけられた時より、だけの事ではない。今日、所謂精神科學と言はれてゐる、哲學・宗教學・倫理學・教育學、更に社會科學と言はれてゐる、法律學・政治學・經濟學の中から、歐米思想を取除く時に、果して、日本的一・獨創的な何物が残るであらうか。その事を考へて、私は、今日の吾々日本人に、一種の哀れを覺えたのである。

明治の初年以來、日本人は、精神的にも、物質的にも、歐米の文物を模倣して來た。勿論、模倣は、異質の文化が直接觸する時に、多かれ少なかれ、相互の間に起つて來る、或程度まで必然的なものであつて、止むを得ないものであり、又凡ての進歩は、模倣の基礎の上に築かれて行くものである。とも言ふことが出来るのであつて、決して模倣を悪いものと言ふことは出來ないのであるが、本來、模倣は、一面創造性を阻害する性質を有し、從つて模倣に墮すれば、常に他人の後塵を拜して行かなければならぬいやうな結果にもなるのである。殊に、模倣は、創造に比して、易行の道であるだけに、誰でも模倣には墮し易く、遂には安逸を食する事にもなるのである。事實、日本人は、模倣の秀才である。けれども、今陳べたやうな理由からして、模倣の習慣に墮し、今日尙ほ、模倣的秀才の多くが、模倣の秀才であり、且つ模倣的秀才でしかあり得ないと同様な哀れさである。

自分で考へるよりは、人の考を眞似た方が、早く、樂であるといつた小賢しい考が、今日日本人の進歩を何れ支け阻んで居ることか。餘り多くの見るものと、餘り多くの聞くものとに幻惑され、引張り廻されて、一寸でも、踏み止つて、物事を眞面目に考へてみようとしない。工夫のない人生、

既に十年も前から、パリーとカレーとの間には、ゴールドン・アロー（金矢）といつたやうな名前の列車が、何本か走つてゐて、凡そ歐羅巴を旅行したことのある人は、誰でも知らない者はなかつたであらう程度有名である。従つて、列車に名前をつけたのは、某氏の獨創ではなかつた。けれども、私の哀れを覚えたのは、この一つの事實に對してのみではなかつた。

凡そ、今日我國の機械文明の中から、歐米傳來のものを差引いたならば、我國に於ける獨創的な何物が残るであらうか。否、それは唯だ機械文明

けふ 今日の仕事を明日繰返すに過ぎない事務的人生、
それに、刻々に變轉して行くニュースを追ふ生活
の慌しさ、慌しく、忙しくして、何等の効果も舉
げ得ない人生。かういつた生活の中に、日本人は
疲れ切つてゐる。潰刺たる生氣を失つて、無反省
の昏睡状態に陥つてゐるといつてもよからう。恰
も、アルコール中毒者の如く、又ニコチン中毒者の如く、假令自らその害毒を意識してゐても、遂に酒や煙草を止めることは出來ず、知りつゝも、自らを害毒に墮せしめてゐると同様、哀れな現象である。

何事か爲さうとする時に、先づ人頼みといつた性格を、吾々日本人は捨てゝしまはなければならぬ。吾々自らに、自信がないから、一寸した、目新らしい事、耳新らしい事にも動搖を感じるのである。一週間や一月、新聞を見ないでゐても、ラ

ヂオを聞かないであっても、世の進展に何等の影響もない。否、寧ろこの期間を、徹底的に考へ抜いた方が、何れ丈ヶ世間を益する結果を齎すか知れない。「大學」に

「止ることを知つて後に定まること有り、定つて後に能く靜かなり、靜かにして後に能く安し、安くして後に能く慮る、慮つて後に能く得」とあるが、昨今の世態を見て、この言を味ふことに切なるものがある。

釋迦や基督の言葉に感心する前に、先づ自ら、眼前の苦難を背負つてみようではないか。吾々は、偉人の如く、聖人の如く、自らも言ひ得る人物であり得るといふ自信を持ち度いものである。人の言に聞くはよい。けれども先づ自らに信念を作つて置け。事物を模倣するもよい。けれども、明日は之に一步を進めるの工夫が必要である。



講座 連続 讀史と躬行

(九)

國體の明徴

西洋の學問をした人は、我が國をイギリス、フランス、ドイツ、アメリカ合衆國等の國家と比較して考へる。こゝに大なる間違がある。支那は大統一の國家觀念を有つて居る。この點、我が國も同一である。八紘一宇の表現がそれである。西洋の中世に於ける神聖ローマ帝國はそれで、世界統一の理想を抱いて、ローマ法王とローマ皇帝(日本の)とが相共に世界に號令するを理想としたのである。

ローマ皇帝の政權の由來は、神の恩寵であつて、皇帝の戴冠式は法皇の掌るところ、皇帝の稱號は戴冠式後始めて稱へらるゝ制であつた。恰も我が將軍に相當し、その名目もローマの外征將軍の官名を踏襲したに過ぎぬ。法王の威令は英、佛、西、葡に及び、これ等の國王が神聖ローマ皇帝となり得たのである。法王が新陸地發見後、西、葡二國に對し、世界を二分して新發見地の領有を許可したことは我が國中等學校西洋

史教科書にも明記してある周知の事實で、英佛の植民地政策はローマ法王のこの法令を侵犯した所業であつた。かの歐洲宗教改革は政教ともに世界大統一の理想を破棄したもので、我が國の大名に相當する國君の信ずるところの宗教は領内住民の宗教となつた。ウエストファリヤ條約後の神聖ローマ皇帝は皇帝の稱は保持したが、我が國で大政奉還後一般大名格になつた徳川家のやうなもので、支配者の格から同等格に下つたやうなものであつた。而して帝國內の強藩プロシヤの如きは、英佛諸強國と對等の國際關係を有つやうになつた。

かういふ事態の國家對立の下にローマ法王は猶ほその政權を世界的に行使しようとしてゐるが、それは行はれなかつた。ナポレオンは歐洲を席捲し、一時法王から帝冠を受けて皇帝(將軍)となつた。それは豊臣秀吉の天下統一と似て居る。その後プロシヤは北ドイツを統一し、フランスを敗つて、ドイツ帝國を再興したといはれるが、この帝國は、昔の世界統一の理想とは異り、英國、佛國に對立する一國家の統一の意味で、民族意識が強調せられて居る實は小國主義なのである。彼の國の法理上、聯邦國であつて、一國ではないこと怡もアメリカ合衆國が名詮自稱、多數獨立國家の集合であると同義である。

ドイツ統一の當時イタリヤの民族的統一運動の中心となつた現在のイタリヤ王家は、日本でいへば一萬石の小大名であつたが、法王の御領までも併合し政教分離の國體を作つた。ドイツも同様政教の一致は出来ず、その政治上の統一も強國プロシヤの率ゐる國際聯盟に過ぎなかつた。

明治維新が、ドイツ統一やイタリヤ統一と時を同うしてゐるので、これを世界の大勢に順應した民族的統一運動だなどと見るのは大なる誤解である。江戸幕府の政治は國防のことからその無力を暴露したけれども、事實、二百餘年中央集權の政治をなし、國民をして太平を謳歌せしめた。これは西洋の歴史には見えないことである。明治維新が祭政教一致の御親政となり、兵權をも御統帥遊ばされることとなつたと異りて、ローマ法王の國土人民支配權が、イタリヤ統一によりて失はれた。(現在でもローマ法王宮には親兵があり、イタリヤ國の支配に屬せぬ法王領土がある)。けれどもムッソリーニのファシズモ政治でもヒットラーのナチス政治でも犯すことの出來ぬのは、ローマ法王の宗教上の威令である。西洋史を讀む者はこゝに十分に注意するを要する。

さて西洋の國家學は我が國の藩に當るState(國家)を對象とした學問である。その國家は政治宗教の大統理想から獨立自主の形を取つた對立的の形態で、民族一國家を理想とし、世界大戰後、民族自決主義による大小國家の平等を主義として世界國際聯盟を結んだのである。この事實を眼中に置かずして西洋書を讀むものは祭政教一致の國體の理解を困難ならしめる。ドイツではビスマルクでも、廢藩置縣を行ふことができず、今度のヒットラー・ナチス第三帝國になつて初めて我が國の中央集權統一政治に追隨するを得た。而して今日獨伊兩國內治に於ける指導者國家の理念、國際間の指導理念といふものが我が國の滿洲國擁立八紘一宇の皇謨に追從したものである。日滿兩國の親善は兩皇室が範を垂れさせ玉うてゐる一德一心の皇道で

ある。

明治天皇の御偉業は皇政復古であり、同時に明治の維新であつた。皇政復古は將軍が兵馬の權を擴充して土地人民の支配にまで専らにした政治組織に伴ふ世官世職の制度を改め、神武天皇の御親政の古制に復せられたことである。歐洲に於て行はれた統一運動でもなければ民族運動でもない。ローマ法王の追従し得ざる御稟威の力である。

明治維新的大業は庶民をして處を得せしめたいといふ御觀慮に原く。五ヶ條御誓文に現はれた、萬民を赤子として御慈み遊ばされる御聖慮は、これは惟神の道で、外國から來たものではない。武家政治は階級觀念が強く、印刻せられて、專制搾取の民政が行はれたやうに追想される。從つて西洋の農奴解放の如きことが版籍奉還によつて行はれたものゝやうに考へ、封建制度といふ漢語が維新前の武家政治に對して用ゐらるゝところから、日本の維新前諸般の文化が西洋の封建時代相當のものであるやうに考へるものがあるのは誠に皮相の見解である。

封建制については、日本の莊園制度の崩壊から發達した武家政治の發達史を明かにせねばならぬ。かの大名を諸侯などゝいふ漢字を宛てたことが、日本農政に關する知識の不足した漢學者をして國史の理解を誤まらせたと同様、西洋の國家學書や歴史書の翻譯に當り、漢字を用ゐたがために二重の誤りを讀者に生ぜしめる誤りがある。而して又支那は德治主義の君主國であるから、漢學者の中には、國體を明徴にした大日

本史や日本政記の如きですら、基督教の廢立の所業を稱讚するやうな態度に出るのは、儒教に拘はり、却つて大義名分を誤り、本來輕重を失つた所業である。

さすがに、本居宣長大人は

陽成院天皇御行爲悪くましまししによりて藤原基經大臣の下し奉られしは、國のため世のため賢く忠なる如くに聞ゆれども、古への道に非ず、外國のしわざにして、いとも可畏く此より天皇の御稟威は、漸に衰へ坐して、臣の勢いよく強く盛りになれるに非ずや

と論ぜられてゐる。これこそ、眞に國體の本義に徹してゐる。

明治維新當時輸入した自由の思想は米國獨立の宣言の人權論から出發する。この人權論は國體に反する。

長谷川昭道先生は

皇國は君ありて然る後に臣民あり、臣民は即ち君の爲に生ずるものにして、決して臣民の爲に君を立つるものにあらざること昭々明々也。是れ祖宗建國の實體にして、即ち皇國の本體なり、國體の性質なり。是故に君臣の分一定して動かざること、猶ほ日地の變易せざるが如し。是れ國體の尊嚴世界萬國に冠絶する所以なり

と。實に我が國土は神の生みたまへるところで、我等皇國臣民は天孫御降臨以來、御歷代天皇に臣事しまつた祖先の血を傳承してゐる。この國體は世界廣しといへども、よくこれに追従する國はない。

大倉山だより

◇大倉所長の動靜

大倉所長は從來の實業界の關係を今度全部退かれ、専ら精神文化研究所の事業思想界、教育界等の方面に力を注がれることとなつた。新體制の時局下に於てこれから所長の活動に各方面から非常な期待が寄せられてゐる折柄、一段どこの方面的活動に拍車がかけられることとなるらう。

式典参列：十月三十日には明治神宮外苑憲法記念館に於ける教育勅語渙發五十周年記念式典に参列。この日文部大臣より民間教育功勞者として榮えの表彰をうけられた。なほ十一月十日の紀元二千六百年式典ならびに十一日の紀元二千六百年奉祝會にも夫々参列の榮に浴された。

會合出席：十一月新しく組織された厚生省産業報國中央聯盟設立準備委員會の委員に委嘱され、同月六日の第一回委員會及び九日の同會合に夫々出席。また十三日文相官邸に於て開かれた全國私立大學長會議に列席された。

◇「大日本精神史」の編修委員會

第八回編修委員會は十一月九日研究所に於て開催された。席上、新見編修長の「身分の考へに就て」と題する講演があり、研究員一同も列席して聽講した。なほこの日は研究員の研究調査報告を延期し、特に精神史編修上の中心問題を取り上げて熱心に討議が重ねられた。

◇編修部の研究會

精神史編修部の研究協議會は新見編修長指導のもとに、その後十月二十二日、同二十九日、十一月十二日、同十九日

日に開催、研究調査史料を問題的に整理・検討した。なほ、十一月一日には福井久藏博士の「明治初期に於ける國語・國文の問題をめぐりて」と題する講演を聞いた。

◇宮城外苑整備事業に勤労參加

紀元二千六百年式典を數日の後にひかへた十一月五日、研究所では一隊（参加二十四名）を組織し、東京市の肇國奉公隊宮城外苑整備事業に參加、終日感激裡に勤労奉仕作業に從事した。

◇大倉山修養會

十一月六日 東京電機マツダ支社幹部工員	六十名	九月二十九日 明治大學學生	四十名
十一月七日、八日、九日 廣島鐵道局中堅幹部職員	三十二名	十月五日 河北省小學校長訪日視察團	十五名
十一月十五日 東京電機マツダ支社幹部工員	五十五名	十月十一日 芝浦電氣從業員	三十四名
十一月十八日、十九日、二十日 遞信官吏練習所無線科職員生徒	四十名	十月十四日 愛媛縣大節塾々生	二十名
		十月二十五日 川崎市元住吉小學校母の會員	七十名
		十月二十六日 横濱市神奈川小學校母の會員	五十名
		十一月三日 横濱市在住二世會員	二十五名
		十一月十九日 横濱市中區國防婦人會幹部	百名

◇富士見幼稚園同窓會と富士見少年團

本所附屬富士見幼稚園同窓會は十一月十七日研究所で開かれ、大倉園長先生を初め恩師を圍んで和氣藹々裡に歡談し、小運動會を催した。なほ本所指導の富士見少年團早起會四十名は十一月九日研究所を見學した。

◇阿部所員歸還

昨年五月、勇躍應召した阿部所員は南支の戰塵をあつてこの程目出度く歸還。十月二十九日研究所神殿に於て歸還奉告祭を執行した。

◇最近の主なる參觀者

九月二十五日 早稻田國際學院生徒

九月二十八日 社會教育學院研究生

二十名

大倉山だより

編

輯

後

◇いよいよ本年の最終號を送る。歲末を迎へて回顧一夕に盡きないものがある。果して暮れの清算、餘刺ありや否や。柱に残されたカレンダーの一枚々々を横にながめて、お互に爲すべきを爲し、退轉なく、空過なく勇猛精進であつたであらうか。胸に手を當て、先づ自省自察する必要がある。

◇一瞬が眞實なれば一日が眞實であり、一日が眞實なれば一年が眞實である。従つて一生も亦眞實を以て充さる、釋尊の所謂「われ成道よりこの方五十年に近く、定慧精進眞實なりき」と回顧することも出来るであらう。お互に放心することなく、健全明朗な志向と生活行を通して、國家と一枚にならねばならない。

◇紀元二千六百年頌歌に

遠すめろぎのかしこくも
はじめたまひし おほ大和

天つ日嗣のつぎつぎに
御代しろしめす たふとさよ
と讃頌した感激と歡喜は、今に新たなるものがある。

◇水を見ては源を思ふ譬の如く、悠久二千六百年、具さに皇祖御創業の御理想を追慕し、天業の恢弘に益々國民的覺悟を新にすべき歴史の朝は明けた。見よ大東亞の天地、はるか椰子の葉陰、胡沙吹く征野の隅々にまで一八紇一字の光はふりそそぎ、四民齊しく高らかに聖壽の萬歳を唱和した。この聖紀の慶祝、永く後世に傳へて以て子孫と共に國運隆興の成果を擧げる。これぞ我々に課せられた大使命でなければならぬ。

◇「祝ひ終つた、さあ、働く」がたゞ

の一片の標語に終つてはならない。

お互に職分に奉公し、よく諸調協力して臣民道實踐の實を擧げねばならぬ。卷頭主論文『和らぐ心』はこの秋

この際正に必讀の文字である。これは大倉先生がAKの朝の修養講話でと讚頌した感動と歡喜は、今に新たなものがいるものがある。

◇仰山すぎた思はせ振りや、徒らに

口舌を弄することをやめ、眞に滅私

奉公、體當りで進まう！

して頂きたい。

昭和十五年二月三日印刷
停定價送料共一部金五錢
横濱市港北區太尾町大倉山
編輯兼發行人 山田勝二
東京市蒲田區仲六郷一ノ五
印刷者 三省堂蒲田工場
代表者 喜多見昇
横濱市港北區太尾町大倉山
發行所 躬行會
電話 横濱綱島五〇番
振替口座 横濱四六〇一番

記

各票の金高不同及び書體不良のものは事故を起して送金が

申込書

躬行新規 月號ヨリ 月號マデ 人分

貴誌の信條實踐に贊同し購讀申込候也

住所

氏名

躬行會 御中

書名

其他出版物

遅延し又は不達になることがありますから御注意下さい

◇いよいよ本年の最終号を送る。歳末を迎へて回顧一夕に盡きないものがある。果して暮れの清算、餘剰あ

天つ日嗣のつぎつぎに御代しろしめすたふとさよと贊頁

この際正に必讀の文字である。これまた奇比三

讀者各位へ御願ひ

- 御送金の際は新規申込か繼續申込か通信文の欄に御記載願ひます。
- 移轉御通知の際は舊住所も御記入願ひます。

×

×

躬行は大倉邦彦先生監修の下に三箇の信條五箇の實踐を全國に普及し、皇運扶翼の臣民道が凡ての人々に徹底する事を願ふより外何等の要求を持つてゐません。世誌代は實費で内容はなるべく分り易く適切なものとする事に力めて居ります。世間では雑誌の生命は宣傳だと云つて居りますが、躬行は仰々しい廣告宣傳を好まず、或は又支部を設け支部長をつくる事なども致しません。それでも讀者は月々増加して行く事は、日本の爲め感謝に堪へぬところであります。

食前感謝

常思猛進偈

- 此食物が食膳に運ばれる迄には、幾多の人々の労力と神佛の加護による事を思つて感謝致します。
 - 私共の徳行の足らざるに、此食物を頂くことを過分に思ひます。
 - 此食物に向つて、貪る心、厭ふ心を持しません。
 - 此食物は私共の心身を癒す良薬と心得ていたゞきます。
 - 此食物は皇運扶翼の道を行ぜんがためにいたゞく事を誓ひます。
- 一ツニハ今日の一日も、死際の一日も變りなし。短かき生命を意義深く、力強く、愉快に生きん爲めには、明日の日を待たず、今日より取りかゝらん。
- 二ツニハ現實刻々の生活の場所が、その儘信仰の道場なり。かくてこそ、信仰は力となり、喜悅となり、命となる事を信ず。
- 三ツニハ日々三省して心鏡を磨き、宇宙正法の如實に顯現せんことを祈り、正しき人生觀を確立して眞と善と美とを踏占めつゝ、信ずる所に邁進せん。
- 四ツニハ我民族は天孫を中心として、史的發展をなし、國家生活に於て、天才的國民たりしを自覺自重し、赤誠報國の大乘國民たらん事を念願す。
- 五ツニハ禮節を知るものは衣食足るに至る事を信ず。

◇いよいよ本年の最終號を送る。歲末を迎へて回顧一夕に盡きないものがある。果して暮れの清算、餘剩ありや否や。柱に残されたカレンダーの一枚々々を横にながめて、お互に爲すべきを爲し、退轉なく、空過なく勇猛精進であつたであらうか。胸に手を當てて、先づ自省自察する必要がある。

柱に残されたカレンダーの一枚々々を横にながめて、お互に爲すべきを爲し、退轉なく、空過なく勇猛精進であつたであらうか。胸に手を當てて、先づ自省自察する必要がある。

柱に残されたカレンダーの一枚々々を横にながめて、お互に爲すべきを爲し、退轉なく、空過なく勇猛精進であつたであらうか。胸に手を當てて、先づ自省自察する必要がある。

◇一瞬が眞實なれば一年が眞實であり、一日が眞實なれば一年が眞實である。従つて一生も亦眞實を以て充され、釋尊の所謂「われ成道よりこの方五十年に近く、定慧精進眞實なりき」と回顧することも出来るであらう。お互に心存することなく、健全明朗な志向と生活行を通じて、國家と一枚にならねばならない。

◇紀元二千六百年頌歌に遠すめらぎのかしこくもはじめたまひし おほ大和

天つ日嗣のつぎつぎに御代しろしめす たふとさよと讀頬した感激と歡喜は、今に新たなものがいる。水を見ては源を思ふ譬の如く、悠久二千六百年、まさに皇祖御創業の御理想を追慕し、天業の恢弘に益々國民的覺悟を新にすべき歴史の朝は明けた。見よ大東亞の天地、はるか椰子の葉蔭、胡沙吹く征野の隅々にまで、八紘一字の光はふりそそぎ、四民齊しく高らかに聖壽の萬歳を唱和した。この聖紀の慶祝、永く後世に傳へて以て子孫と共に國運隆興の成果を擧げる。これぞ我々に譲せられた大使命でなければならぬ。

◇「祝ひ終つたさあ、働かう」がたゞお互いの標語に終つてはならない。お互に職分に奉公し、よく諧調協力して臣民道實踐の實を擧げねばならぬ。卷頭主論文『和らぐ心』はこの秋

この際正に必讀の文字である。これ

は大倉先生がAKの朝の修養講話で

全般へ放送された原稿で、折角味讀して頂きたい。

◇仰山すぎた思はせ振りや、徒らに口舌を弄することをやめ、眞に減私奉公、體當りで進まう！

昭和五年十一月二十五日印刷

編輯兼山田勝二

發行人横濱市蒲田工場

印刷者三省堂喜多見昇

發行所横濱市港北區太尾町大倉山

記

後

拂込通知票	
氏名	拂込人
住所	※
※一金	
加入者	番号
氏名	口座
横濱市港北區太尾町大倉山	横濱四六〇壹番
躬行會	
印附日廳管所座口	
印附日局付受	

各票金高に相違なきことを必ず確ること

拂込票	
氏名	拂込人
住所	※
※一金	
加入者	番号
氏名	口座
横濱市港北區太尾町大倉山	横濱四六〇壹番
躬行會	
印附日廳管所座口	
印附日局付受	

數字は必ず楷書、文字は正確明瞭に書くこと

各票の金高不同及び書體不良のものは事故を起して送金が

中込書

躬行

新規
繼續

月號ヨリ

月號マデ

人分

貴誌の信條實踐に贊同し購讀申込候也

住所

氏名

躬行會御中

其他出版物

書名

冊數

遅延し又は不達になることがありますから御注意下さい

讀者各位へ御願ひ

一、御送金の際は新規申込か繼續申込か通信文の欄に御記載願ひます。

一、移轉御通知の際は舊住所も御記入願ひます。

×

躬行は大倉邦彦先生監修の下に三箇の信條五箇の實踐を全國に普及し、皇運扶翼の臣民道が凡ての人々に徹底する事を願ふより外何等の要求を持つてゐません。

誌代は實費で内容はなるべく分り易く適切なものとする事に力めて居ります。世間では雑誌の生命は宣傳だと云つて居りますが、躬行は仰々しい廣告宣傳を好まず、或は又支部を設け支部長をつくる事なども致しません。それでも讀者は日々増加して行く事は、日本の爲め感謝に堪へぬところであります。

食前感謝

常思猛進偈

一、此食物が食膳に運ばれる迄には、

幾多の人々の努力と神佛の加護によるこことを思つて感謝致します。

二、私共の徳行の足らざるに、此食物を頂くことを過分に忌ひます。

三、此食物に向つて、食る心、厭ふ心を起しません。

四、此食物は私共の心身を癒す良薬と心得ていたゞきます。

五、此食物は皇運扶翼の道を行ぜんがためにいたゞく事を誓ひます。

一ツニハ今日の一日も、死際の一日も變りなし。短

かき生命を意義深く、力強く、愉快に生きん爲めには、明日の日を待たず、今日より取りかゝらん。

二ツニハ現實刻々の生活の場所が、その儘信仰の道場なり。かくてこそ、信仰は力となり、喜悅となり、命となる事を信ず。

三ツニハ日々三省して心鏡を磨き、宇宙正法の如實に顯現せんことを祈り、正しき人生觀を確立して

眞と善と美とを踏占めつゝ、信する所に邁進せん。

四ツニハ我民族は天孫を中心として、史的發展をなし、國家生活に於て、天才的國民たりしを自覺自重し、赤誠報國の大乘國民たらん事を念願す。五ツニハ禮節を知るものは衣食足るに至る事を信ず。

大倉邦彦著

勤労教育の理論と方法

宗教的行としての集團勤行

〔教學局選奨圖書〕

(三省堂發行)

四六判 二二一八頁

定價 一圓三〇錢

送料 一〇錢

(内容目次)

- 第一章 學問研究の本領(八節)
- 第二章 主知主義の教育は何を生んだか
- (三節)
- 第三章 行及び行としての勤労(九節)
- 第四章 生活行

今や全國に亘つて實施せられつゝある勤労奉仕・集團勤行の窮屈の目標は日本古來の宗教的行の深味に徹し、勤労そのものを通じて人間を鍊成することにある。本書は十數年來、行及び行としての勤労教育を提倡して來た著者がその貴き體験を基に、勤労奉仕・勞作報國の指導精神とその具體的方法を平易に説示せる好箇の指針である。

日本產業道

〔増刷發賣中〕

(日本評論社發行)

四六判 三三四頁
定價 一圓
送料 一四錢

第十七章
第十六章
第十五章
第十四章
第十三章
第十二章
第一章

日本産業の躍進とその危機
日本精神の本質(四節)
日本産業の指導精神(三節)
人事管理との福利教養(五節)
勤労精神による株式會社
修養(四節)

日本精神による産業は國體の本義に則り、勞資一體となつて國家目的の遂行に協力する皇運扶翼の經濟活動でなければならぬ。今 日實施されつゝある全國的な産業報國運動の窮屈もそこにある。本書は著者多年の提唱をまとめ、極めて平易に而も我が國産業の實地に即して運營の指導精神と具體策、勞務者養成の方法を明かにされたものである。

[附添誌本は込申
てに紙用替振]

大倉精神文化研究所

講讀所申込